

友人ネットワークサイズと社会的自尊心の関連

－日米大学生の比較－

宮本 聡 介 (明治学院大学心理学部)

要 約

友人ネットワークの大きさが自尊心と関連することが指摘されている。本研究では友人ネットワークサイズと社会的自尊心の関連を、日本人、アメリカ人で比較検討することを目的とする。日本人169名、アメリカ人220名が回答した。この中から18～22歳の回答者をスクリーニングし分析を行った。友人数、親友数はアメリカ人の方が多く、アメリカ人の方が友人ネットワークサイズが大きいことが示された。携帯に登録されている友人数に差は見られなかった。本研究で作成した社会的自尊心尺度は高い信頼性と妥当性を有していることが確認された。日本人では社会的自尊心尺度と友人ネットワークサイズのあいだに有意な正の相関が示された。一方アメリカ人では社会的自尊心と友人ネットワークサイズとの相関が日本人に比べて弱かった。このことからアメリカ人よりも日本人において友人ネットワークサイズと社会的自尊心との関連が強いことが示唆された。

問題

我々に求められる基本的な対人関係スキルの1つに「友人作り」がある。一見あたり前に思える社会的スキルであるが、容易に友人を増やす者もいれば、なかなか友人を作れない者もいるなど、友人作りスキルには個人差がある。また、多くの友人を求めることを良しとする個人もいれば、質の良い友人を選択的に求める個人もいるように、友人に対する価値の置き方にも個人差がある。質の違いはあれど、良好な友人関係を築くことが精神的健康に及ぼす肯定的な影響を報告した研究は多数ある。例えば友人関係満足感と生活満足度のあいだの正の相関(高倉, 新屋, 平良, 1995), 友人関係満足感と快感情経験・自尊感情との正の相関(鈴木, 2002), 友人関係確立の度合いと孤独感との間の負の相関(中野・永江, 1996)などがこれに該当する。また、友人関係親密度と学習への取り

組みのあいだの正の相関(吉田・橋本・安藤・植村, 1999; 植村・小川・吉田, 2001)にあるように、良好な友人関係は勉強面にも肯定的な影響を及ぼすようである。友人関係の機能を検討した研究も多い(詳細は丹野・松井(2006))。これによると友人関係機能は「相談・自己開示」「相互理解」「娯楽性」「支援性」「類似性」「安心」「尊敬・信頼」に分類されている。理解, 支援, 安心, 尊敬, 信頼などの機能に見られるように、友人関係によって個々人が相互に肯定的に影響し合うことを想定した機能が多く指摘されており、友人関係が適切に進行しているならば、その関係が人々に肯定的な影響を与えることが予想される。

では、我々はこうした友人をどれくらい規模で有しているのだろうか。近年、社会的ネットワークの観点から友人数・知人数を推定する手法が開発され、友人・知人数の推定が試みられている。例えば調査者があらかじめ用意した

苗字に対し、何人その苗字の人を知っているかを回答者に回答させ、その総数から回答者の友人・知人数を推定させるネームジェネレーター法を用いた辻・松山・針原（2002）によると、友人・知人数の推定値は272.8～329.4人だった。同様の手法を用いた大戸（2005）は友人・知人の推定値を129.8人と報告している。民間企業が行った友人数・親友数の調査（オリコン、2010）によると、専門学校生・大学生では平均44.8人の友人がいることが報告されている。同時に、友人数は年齢が上昇するにつれて減少する傾向も報告されている¹。小・中・高等学校や大学などの修学期が友人との出会いの場であることは、過去の調査・研究で繰り返し報告されている（例えば内閣府政策統括官、2004；宮本、2007）。各教育段階を卒業、修了し、次の教育段階に進学することによって、古い友人関係と疎遠になる可能性がある。公立学校を例にとると、小学校から中学校へ進学する時には、学区の縛りがあるので、ほぼ同じメンバーが持ち上がりで中学校へ進学する。しかし中学校から高等学校へと進学するときには、学区の縛りがなくなるため、中学校のときの級友がそのまま同じ高校へと進学するわけではない。それでも高校では新しい仲間と出会う機会があるため、友人数に減少は見られない。しかし大学を卒業し、社会人になると、修学期と同程度に友人を形成する機会に恵まれるわけではない。社会人経験が長期化すると、流動性が少なくなるぶん、新しい友人との出会いの機会が減少する。その結果、友人数も減少することが予想される。

友人数の多少が、当人の心理的・身体的側面に与える影響を報告する研究もいくつかある。鈴木・藤生・田上（1999）は自己効力感が高い者ほど友人数が多くなることを示している。山口（2004）は大学生活において友人数が多いほど卒業・就職しやすいことを報告した。松尾ら（2006）はメールの一日使用回数が友人数と正

の相関を示すことを報告している。宮本（2009）では、友人数推定値や携帯電話に登録されている友人数（携帯友人数）が自尊心と正の相関を示した。また友人数推定値と携帯友人数を同時に投入し、どちらが自尊心をよく予測するかを重回帰分析によって解いたところ、携帯友人数のほうが自尊心の高低をよく予測することを示した。高齢者を対象にした研究では、高所得者ほど高齢化した時の友人数が多い（前田、1988）、残存歯数が多い高齢者ほど友人との交流が多いことを報告した研究もある（木谷・谷口・成瀬、2000）。

質、量に優れた社会的ネットワークは、一種の社会関係資本として、当人の社会生活に良い影響を及ぼすと考えられる。さらに、友人数という量的な側面に注目しても、その数が多い者ほど、さまざまな側面でプラスの影響を受けている。友人数が多いということは、広い社会的ネットワークを有しているということの意味する。一概に社会的ネットワークと言っても、そこには様々なタイプの社会的ネットワークがあるだろう。本研究では友人数によって推し量られる当該人物の社会関係資本の大きさに着目し、これを友人ネットワークサイズと呼ぶことにする。

ところで、友人関係に根差した関係ネットワーク（友人ネットワーク）の構築は、どのような文化にも共通の影響力を持っているのだろうか。先述の宮本（2009）では、友人数や携帯友人数が自尊心と正の相関をもつことが報告されている。その理由として友人関係を結ぶという“成功経験”の影響が論じられている。成功経験が多いということは社会経験の経験値を高めることを意味する。そのことが当人の自己価値を高め、自尊心の向上につながっているのではないかと考えられている。しかしながら、このような「友達づくり」が自尊心に正の影響を与えるという現象は、関係志向の強い日本人だからこそ見られる現象ではないかとも考えられる。

近年の社会心理学的な研究の中には、東洋と

1 この調査は、音楽に高い関心を持つモニター登録者を対象に行われたものであり、サンプルに偏りがある可能性は否めない。

西洋の文化的差異に基づいて、対人関係を論じるものが多くある。例えば協力、相互依存、上下関係、礼儀などを重んじ、個人の欲求よりも集団の欲求を優先する集団主義と、独自性、平等性、競争と達成を重んじ、集団の利益よりも個人の利益を優先する個人主義を比較する議論がある (Triandis, 1995)。日本は集団主義を代表する文化圏として論じられることが多い。Markus & Kitayama (1991) は、個としての存在に重きをおき、首尾一貫した西洋タイプの自己概念と、対人関係の中で規定され、他者との関係のありようのなかで表出される側面が異なってくる東洋タイプの自己概念とを区別、比較している。そして西洋タイプの自己を相互独立的自己、東洋タイプの自己を相互協調的自己と呼び、各々の自己の特徴を論じている。Rothbaum, Weisz, & Snyder (1982) は積極的なかわりを通して社会をコントロールするプライマリーコントロールと、自己を社会に適応させることである種のコントロールを達成させようとするセカンダリーコントロールを区別している。このモデルによると、関係志向の強い東洋文化の中では、自己を環境に適応させる形でコントロールを達成しようとするセカンダリーコントロールが優位になると考えられている。

東洋と西洋の対人関係に対する志向性の違いは、友人関係の広がりに対して、両文化が持っている価値づけ方にも違いを生じさせる可能性がある。先述のように、日本では友人ネットワークサイズが自尊心と正の相関を示すことが示されているが、その理由として宮本 (2009) は、友人関係形成に対する成功経験の量的差異が、自己価値と関連するのだと論じていた。これは関係志向の強い日本人だからこそ、友人関係形成の成功を、自己価値を高める1つの証拠として位置付けているのだと考えることもできるだろう。だとすると、友人数のような友人ネットワークサイズと自尊心との間の正の関連は、欧米人よりも対人関係志向の強い日本人においてより顕著に見られるのではないかと考える。

Rosenberg は自尊心を、「自己に対する肯定的あるいは否定的な態度」と定義している (Rosenberg, 1965)。近年では Baumeister らが、高自尊心とは自分に対して高度に好意的な全体評価をしていることを意味し、低自尊心とは自己に対する非好意的な定義を意味すると述べている (Baumeister, Campbell, Krueger, Vohs, 2003)。このように、自尊心とは自己に対する態度であり、自己の一部ではなく、自己全体に対する評価であると考えられている。自尊心が自己全体に対する総体評価であると考えられていることから、自尊心を測定する尺度の場合、その尺度が1因子で構成されているのか否かということに研究の焦点が当てられることがある。Rosenberg の作成した自尊心尺度 (以下 RSES) は単一因子を想定して作成されているが、RSES は「はい」と回答するほど自尊心が高いと判断されるポジティブ項目と、「いいえ」と回答するほど自尊心が高いと判断されるネガティブ項目に尺度が因子分解されたとの報告がある。こうした結果に対して、自尊心を肯定的自尊心と否定的自尊心とに分けるという立場もあるが (Barber, 1990)、方法論的アーティファクト (Carmines & Zeller, 1974)、反応セットの問題 (Hensley & Roberts, 1976) を指摘する研究もある。これらの研究は、自尊心が1因子で構成されているという前提から派生した議論であるが、そもそも自尊心が2因子で構成されていると指摘する研究も早くからあった。

例えば Diggory (1966) は自尊心が“能力に対する客観的評価”“社会的承認と受容”という2つの基準で構成されていると指摘している。Tafarodi と Swann はこれら2つの基準のうち、前者は自己に対する能力評価、後者は自己に対する好意評価であると主張し、この2次元を測定するために自己好意・自己能力尺度を開発している (Tafarodi & Swann, 1995)。

このように自尊心とは何か、自尊心はどのように測定できるのかという議論が1960年代以降盛んになされているが、そもそも自尊心にはな

なぜ個人差があるのだろうか。自己を肯定的に評価するという事は、自己に対して肯定的な態度を持っているということだが、その肯定的態度はどのようにして形成されるのだろうか。本研究では、なぜ自尊心に個人差が生まれるのかという点に着目し、この個人差が、他者との交友経験を通して獲得された対人スキルの自己評価を源泉としているのではないかと考える。そして「友人作り」の結果獲得された友人関係に対する肯定的（否定的）自己評価は、当人の自尊心の一部としてとらえることが可能ではないだろうか。このような自尊心を、友人作りの巧拙に基づいた社会的スキルの実践を通じて形成された、自己に対する肯定的（否定的）態度と定義することができるだろう。本研究では、このような友人関係形成の成否に根ざした自己評価を社会的自尊心と呼ぶことにする。自尊心が自己に対する全体的評価態度であることから、社会関係の経験に根ざして形成された自己に対する評価態度である社会的自尊心は、自尊心の中でも特に対人関係に関連し、その影響を受けやすい自尊心の下位概念と位置づけることができる。

欧米文化圏の1つであるアメリカ人に比べて、東洋文化圏の1つである日本人が関係志向であることは先述の通りである。このことは、対人関係形成の成功・失敗に対してアメリカ人よりも日本人はより敏感である可能性があることを示唆している。特に友人関係の形成に関する成功経験は、自己の対人関係形成能力を高く評価することにつながり、その結果、社会的自尊心が上昇するのではないかと考える。友人ネットワークサイズとの関連で見ると、友人ネットワークの大きい日本人はそれだけ社会的自尊心が高くなり、その関連はアメリカ人よりも顕著に現れるのではないかとということが予想される。

方法

調査対象者：調査対象者は日本人が169名(男性75名, 女性148名, 不明3名), アメリカ人が220名(男性34名, 女性57名, 不明6名)だった。日本人回答者は授業時間中に質問紙を配布し、集団回答形式で回答を求めた。アメリカ人回答者のうち153名は授業に参加している大学生に対してweb上での回答を依頼し、アクセス先のURLを伝えた。残り63名はプリンストン市内にある商業施設で開催されたフェスティバル期間中に、商業施設の許可を得て、街頭インタビューという形で質問紙を配布し回答を求めた。

質問紙の構成：質問紙は以下の尺度、項目で構成されていた。

自尊心尺度 (RSES) : Rosenberg (1968) が作成した自尊心尺度を山本・松井・山成 (1982) が邦訳したものを用いた。10項目で構成されており、「あてはまる」から「あてはまらない」までの5件法で回答を求めた。分析の際には項目を単純加算し、項目数で除した値を用いた。

日本語版自己好意(self-liking) / 自己有能感(self-competence) 尺度 (以下SLSC) : SLSC尺度には1995年版 (Tafarodi & Swann, 1995) と2001年版 (Tafarodi & Swann, 2001) がある。2001年版は1995年版と10項目が重複している。しかしワーディングが完全に一致しているわけではない。そこで、本研究では1995年版を邦訳した藤島・沼崎・工藤を参考にしながら、2001年版を邦訳したものを用いた。16項目の質問に対して、「全くそう思わない」を1点、「強くそう思う」を5点とする5件法で回答を求めた。2001年版に従い、自己好意ポジティブ尺度、自己好意ネガティブ尺度、自己有能感ポジティブ尺度、自己有能感ネガティブ尺度の4つの下位尺度毎に集計した。

社会的自尊心尺度 (Social Self-Esteem Scale (以下SSE尺度) : 友人関係形成の中で培われた自己価値に対する評価を測定する尺度であ

る。12項目からなり、「全くそう思わない」から「強くそう思う」までの7件法で回答を求めた。

友人数：友人数を測定するために、本研究では5つの指標を作成した。友人数は「あなたは友人が何人いますか（How many friends do you have?）」と尋ね、その推定数を回答欄に記入させた。親友数は「あなたは親友が何人いますか（How many close friends do you have?）」と尋ね、推定数を回答欄に記入させた。相対友人数は「同年代の平均的な人と比べて、あなたはどれくらい友人がいますか（How many friends do you have, relative to the average person?）」という問に対して、「多い」から「少ない」までの5件法で回答を求めた。相対親友数は相対友人数の友人（friend）の部分で親友（close friend）に代えて問うた。携帯友人数とは携帯電話に登録されている友人数のことである。ここではまず「あなたの携帯電話には何件のメモリーが登録されていますか（How many entrees does your phonebook have?）」と問い（以下メモリー登録数）、これに続いて、「このうちあなたの友人は何人登録されていますか（In these entrees, how many friends do you have?）」と問うた。

結果

回答者のスクリーニング：友人数は通過したライフステージに応じてその数が増減する。そ

のため、分析対象者の年齢に幅があると、そのことが友人数の多少に影響し、データの信頼性が損なわれる可能性がある。そこでまず、日本人、アメリカ人共に18～21歳の回答者を全回答者の中から抽出した。この範囲に該当する回答者は日本人が168名、アメリカ人が100名だった。これらの回答者を、日本人、アメリカ人こみにして友人数の全体平均値を算出したところ、平均66.4人（ $SD=100.9$ ）だった。友人数が平均値+2SDを超える回答者がいないかどうかを確かめたところ、10名の回答者（日本人1名、アメリカ人9名）がそれに該当した。これらの回答者の友人数に関連するデータが、分析結果を歪める可能性が予想されたため、分析から除外した。最終的には日本人167名（男性34.8%）、アメリカ人91名（男性37.4%）を分析対象として以下の分析を進めた。

友人数の日米比較：Table 1は友人数を日米で比較したものである。友人数は日本人が平均46.5人、アメリカ人が平均59.4人とアメリカ人のほうが有意に多かった（ $t(240)=2.1, p<.05$ ）。親友数は日本人が平均5.0人、アメリカ人が平均9.1人とアメリカ人のほうが有意に多かった（ $t(254)=2.6, p<.05$ ）。相対友人数はアメリカ人（ $M=2.8$ ）の方が日本人（ $M=2.5$ ）より有意に高かった（ $t(251)=2.6, p<.05$ ）。相対親友数はアメリカ人（ $M=3.1$ ）のほうが日本人（ $M=2.6$ ）よりも有意に高かった（ $t(249)=4.0, p<.01$ ）。メモリー登録数（日本人=104.4件、アメリカ人=117.7件、 $t(247)=1.5, n.s.$ ）、携帯友人数（日本人=62.4人、ア

Table 1 友人数、親友数の日米比較

	日本人		アメリカ人		<i>t</i>	
	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>		
友人数	46.5	44.4	59.4	53.4	2.1	*
相対友人数 ¹⁾	2.5	0.9	2.8	0.8	2.6	*
親友数	5.0	6.5	9.1	9.1	4.0	***
相対親友数 ¹⁾	2.6	1.0	3.1	0.8	2.3	**
携帯登録メモリー数	104.4	60.2	117.7	73.3	1.5	
携帯友人数	62.4	49.6	58.5	40.8	0.6	

1) 5件法。値が大きいほど同年代の平均的な人と比べて友人（親友）が多いと回答

*: $p<.05$, **: $p<.01$, ***: $p<.001$

メリカ人=58.5人, $t(245)=0.6$, *n.s.*)に有意差は見られなかった。

SSE 尺度の信頼性と妥当性：SSE 尺度を因子分析（主因子法）にかけ、固有値1以上の3因子を抽出し Varimax 回転後の因子負荷量に基づいて解釈を行った（Table 2）。第1因子は「私には、いつも私を受け入れてくれる友人がいる」「私が病気になると、いつも心配してくれる友人がいる」「私には一生つきあえる友人がいる」などの項目への負荷量が高かった。友人から受け入れられていることへの自己価値の側面に重きをおいた因子であると解釈し、これを「被受容」因子とした。第2因子は「友人が多い自分には存在価値がある」「友人が多いことが私の自慢だ」「私は、私の友人グループの中の価値あるメンバーの一人だ」などに負荷量

が高かった。たくさんの友人に囲まれた自分に対する価値に重きをおいた因子であると解釈し、これを「社会的プライド」因子とした。第3因子は「私は友人から信頼されている」「私は友人としてよく評価されている」「友人と一緒にいると、自信がつく」に負荷量が高かった。友人から信頼されていることへの自己価値に重きをおいた因子であると解釈し、これを「被信頼」因子とした。クロンバックの α 係数を算出したところ、被受容因子は $\alpha=.783$, 社会的プライド因子は $\alpha=.839$, 被信頼因子は $\alpha=.807$ といずれも高い内的整合性を示していた。また日本人回答者 ($N=94$) に対して2か月後に行った調査をもとに、再検査信頼性を算出したところ、被受容因子は $r=.77$, 社会的プライド因子は $r=.67$, 被信頼因子は $r=.60$ だった。再検査信頼性の値

Table 2 社会的自尊心尺度

	日本人		アメリカ人		<i>t</i>	因子負荷量		
	平均値	<i>S.D.</i>	平均値	<i>S.D.</i>		被受容	プライド	被信頼
私には、いつも私を受け入れてくれる友人がいる	5.5	(1.5)	6.0	(1.0)	3.8 ***	.77	.15	.31
私が病気になると、いつも心配してくれる友人がいる	5.2	(1.5)	5.6	(1.2)	2.5 *	.76	.15	.23
私には一生つきあえる友人がいる	5.8	(1.5)	6.3	(1.0)	2.7 *	.75	.03	.29
私は私の友人達を誇りに思っている	5.8	(1.4)	5.9	(1.0)	1.3	.66	.20	.11
私の提案にいつも賛同してくれる友人がいる	4.6	(1.5)	3.9	(1.7)	4.0 ***	.56	.36	.33
友人が多い自分には存在価値がある	3.0	(1.5)	3.3	(1.8)	1.8 +	.13	.89	-.01
友人が多いことが私の自慢だ	3.2	(1.7)	4.5	(1.6)	7.2 ***	.23	.76	.32
私は、私の友人グループの中の価値あるメンバーの一人だ	3.6	(1.5)	4.8	(1.5)	6.9 ***	.13	.65	.41
親友が多いことが私の自慢だ	3.1	(1.7)	4.8	(1.7)	8.8 ***	.24	.65	.45
私は友人から信頼されている	4.1	(1.3)	6.2	(0.9)	15.7 ***	.28	.20	.83
私は友人としてよく評価されている	3.8	(1.3)	5.7	(1.1)	13.0 ***	.20	.28	.81
友人と一緒にいると、自信がつく	4.8	(1.6)	5.8	(1.2)	5.7 ***	.47	.28	.51

がやや低いものの、内的整合性は高く、十分な信頼性を有する尺度であると判断できる。

SSE 尺度の妥当性を検証するために、RSES、SLSC 尺度との相関係数を算出した (Table 3)。RSES と社会的自尊心との相関は、被受容で $r=.81$ 、社会的プライドで $r=.86$ 、被信頼で $r=.82$ といずれも .8 を超える高い値を示した。一方、SLSC 尺度の下位 4 尺度との相関をみると、被受容で $r=.1 \sim .2$ の低い相関、社会的プライドでは $r=.2 \sim .4$ 程度の相関、被信頼で $r=$ は .3 ~ .6 の中程度の相関だった。被信頼因子が SLSC 尺度と中程度の相関を示したものの、被受容、社

会的プライド因子は SLSC 尺度との相関値が低かった。以上のことから SSE 尺度は RSES のような自己価値の総体的評価とは高い相関をもつことが示された。しかしながら SSE 尺度は自己好意・自己有能感尺度のように、自己の有能感や自己に対する好意を測定する尺度との相関が低く、SLSC 尺度が想定している有能感・好意を測定しているわけではない。SSE 尺度が、友人関係などの対人関係の中で培われる自己価値を測定することを目指していることから、自己に対する有能感・好意とは弁別され得ることをこの結果は示しているとも考えられる。以上

Table 3 社会的自尊心尺度 (SSE) の基準関連妥当性の検討

	被受容 (N=256)	社会的プライド (N=256)	被信頼 (N=256)
Rosenberg の自尊心尺度 (RSES)	0.81 **	0.86 **	0.82 **
自己好意・自己有能感尺度 (SLSC)			
自己有能感ポジティブ	0.18 **	0.44 **	0.62 **
自己有能感ネガティブ	- 0.10	- 0.20 **	- 0.34 **
自己好意ポジティブ	0.24 **	0.37 **	0.56 **
自己好意ネガティブ	- 0.19 **	- 0.33 **	- 0.49 **

のことから SSE 尺度はある程度の構成概念妥当性を有していると判断できる。

SSE 尺度を下位尺度毎に日米比較すると、社会的プライド (日本人 =3.2, アメリカ人 =4.4, $t(250)=7.2, p<.001$)、被信頼 (日本人 =4.3, アメリカ人 =5.9, $t(251)=12.1, p<.001$) はアメリカ人のほうが有意に高かったが、被受容には有意差は見られなかった (日本人 =5.4, アメリカ人 =5.6, $t(251)=1.3, n.s.$)。

自尊心と友人数に関連した各指標との相関: Table 4 には SSE, RSES, SLSC の各尺度と友人数との相関係数の値を示した。まず日本人データに注目すると、RSES と友人数、携帯友人数との間に有意な正の相関が示された。これは宮本 (2009) と同様の結果が得られたことを

意味している。一方、アメリカ人データをみると、携帯友人数と RSES との間には有意な相関が認められたが、友人数と RSES とはほぼ無相関だった。また、日本人、アメリカ人共に RSES と相対友人数、相対親友数との間に有意な正の相関が示された。以上の結果から、日本人においては友人数の増加と自尊心との間に正の関連があることが改めて確認されたといえる。またアメリカ人においても同様の傾向が認められたといえるだろう。

一方、SSE 尺度と友人数に関する各指標との相関をみると、日本人とアメリカ人とで大きく異なっている。例えば被受容因子をみると、日本人では親友数以外の指標で正の相関が示されたが、アメリカ人で有意な相関が示されたのは

Table 4 友人ネットワークサイズと自尊心の関連

	社会的自尊心尺度			Rosenberg の自尊心 尺度	自己好意・自己有能感尺度			
	被受容	社会的 プライド	被信頼		自己有能感 ポジティブ	自己有能感 ネガティブ	自己好意 ポジティブ	自己好意 ネガティブ
日本人								
友人数	0.22 **	0.25 **	0.08	0.23 **	0.13	0.05	0.10	- 0.03
相対友人数	0.33 **	0.48 **	0.35 **	0.46 **	0.38 **	- 0.17 *	0.34 **	- 0.24 **
親友数	0.04	0.17 *	0.06	0.11	0.04	- 0.05	0.01	- 0.13
相対親友数	0.28 **	0.35 **	0.29 **	0.37 **	0.16 *	- 0.06	0.08	- 0.07
携帯友人数	0.31 **	0.22 **	0.19 *	0.30 **	0.05	- 0.07	0.11	- 0.08
アメリカ人								
友人数	- 0.15	0.16	- 0.07	0.00	0.03	- 0.07	0.08	- 0.05
相対友人数	0.21 *	0.41 **	0.19	0.36 **	0.03	- 0.14	0.13	- 0.23 *
親友数	- 0.14	0.11	- 0.09	- 0.01	- 0.12	0.00	0.07	- 0.15
相対親友数	0.08	0.37 **	0.03	0.25 *	0.04	0.13	0.00	- 0.02
携帯友人数	0.06	0.38 **	0.11	0.26 *	0.07	- 0.07	- 0.03	- 0.05

相対友人数のみだった。被信頼因子をみると、日本人では相対友人数、相対親友数、携帯友人数で有意な正の相関が認められたが、アメリカ人では有意な相関は認められなかった。日本人とアメリカ人とで相関係数に類似のパターンが見られたのは、唯一社会的プライド因子だけだった。またSLSC尺度で下位4尺度すべてと有意な相関が認められたのは日本人の相対友人数のみだった。その他、日本人、アメリカ人共にSLSC尺度と友人数との間に主だった関連は示されなかった。

考察

本研究の主要な目的は、友人ネットワークサイズを表す指標の1つである、友人数や携帯友人数が、日米両文化において自尊心と正の相関を持つのかどうかを明らかにすることであっ

た。本研究では、対人関係の成否によって、自尊心の下位概念である社会的自尊心が影響を受けると予想し、友人ネットワークサイズと社会的自尊心との関係を明らかにするためにSSE尺度の開発を試みた。

因子分析の結果、12項目で構成されたSSE尺度から被受容、社会的プライド、被信頼の3因子が抽出された。被受容、被信頼は、自分が友人に受け入れられている、信頼されているということ価値付ける受け身な自己評価の側面を表していた。社会的プライドは、自分の能力に対するプライドではなく、自分に友人・親友が多いということに対する自己評価の側面を表していた。高い信頼性を有し、ある程度の妥当性も確認されたと言えるだろう。

推定された友人数、親友数はアメリカ人の方が日本人よりも有意に多かった。日本人が友人数を多く報告することを指摘する研究があるが

(例えば平井・高橋, 2003), 今回の研究においては, アメリカ人の方が日本人よりも自分の友人・親友数を多く答える傾向が見られた。この結果を受け入れるならば, 友人ネットワークサイズは日本人よりもアメリカ人のほうが大きいということの意味している。

友人数や携帯友人数と社会的自尊心との関連には, 日米に違いが見られた。例えば被受容因子を見ると, 日本人では友人数, 相対友人数, 相対親友数, 携帯友人数が有意な正の相関を示したが, アメリカ人で有意な相関が見られたのは相対友人数のみだった。同様に, 日本人では被信頼と相対友人数, 相対親友数, 携帯友人数との間に有意な正の相関が見られたが, アメリカ人ではいずれの社会的ネットワークサイズ指標も有意な相関を示さなかった。被受容, 被信頼は受け入れられている, 信頼されているという受け身の経験に対する自己価値である。こうした受け身の自己価値としての社会的自尊心は, 日本人では友人ネットワークサイズ指標と有意な正の相関を示すが, アメリカ人では示さなかった。この結果は, 友人数の多少が日本人では社会的自尊心と密接に絡んでいること, またそれは日本人の関係性志向によるものであるということが示唆されたと言えるのではないだろうか。

Tafarodi らによる SLSC 尺度と, 本研究で作成した SSE 尺度とでは, 友人ネットワークサイズの各指標との関連に大きな差異が見られた。このことから, 社会的自尊心が関係性に焦点を当てた自尊心であるのに対して, 自己好意・自己有能観尺度は関係性とは関連の薄い自尊心なのではないかということが示唆される。自己に対する好意や有能感は, 対人関係とは切り離れた, 個人の自己評価に関連しているかもしれない。そのため他者との関係性とは直には結びつかない自尊心を測定していると言えるだろう。関係性の成功経験に根ざした自尊心とそうでない自尊心とを弁別できているという点でも, 本研究で測定した SSE 尺度は, ある程度の構成概

念妥当性を有していると考えられる。

最後になるが本研究の問題点を指摘しておく。

本研究では 200 人を超えるアメリカ人回答者から回答を得ていたにもかかわらず, 分析に用いたのはその半分であった。ここには 2 つの理由がある。第 1 に, ショッピングセンターで集めたデータは, 大学生よりも年長の社会人回答者が多かった。当初はこれらの回答者も分析の対象としていたが, 修学時期の 1 つの区切りである大学を卒業した後, 友人数が微減することがいくつかの調査で指摘されていたことから, 今回の研究では分析から除外した。第 2 に, 授業で回答を依頼したアメリカ人大学生についても, 21 歳を超える大学生の割合が日本人大学生に比べて多かった。本研究でデータを取った大学は, アメリカでも優秀な学生を集める有名大学の 1 つであり, 社会人経験を持つ大学生が比較的多く含まれていた可能性がある。これらの大学生は, 高校卒業後ストレートに大学進学した学生たちと比べて, やや異質な社会経験を積んでいる可能性があることから, 今回の分析からは除外した。そのため, 本研究のデータは 18 ~ 21 歳という年齢層の大学生にしぼられたものであり, 広い年齢層に結果を普遍性に論じるには, 回答者が偏っている可能性があるかもしれない。

引用文献

- Barber, B. K. (1990). Martial quality, parental behaviors, and adolescent self-esteem. In B. K. Barber & B. C. Rollins (Eds.) *Parent-adolescent relationships*. Pp. 49-75, New York: University Press of America.
- Baumeister, R. F., Campbell, J. D., Krueger, J. I., Vohs, K. D. (2003). Does high self-esteem cause better performance, interpersonal success, happiness, or

- healthier life styles? *Psychological Science in the Public Interest*, 4, 1-44.
- Bishop, J. A. & Inderbitzen, H. M. (1995). Peer acceptance and friendship: An investigation of their relation to self-esteem. *The Journal of Early Adolescence*, 15, 476-489.
- Carmines, E. G., & Zeller, R. A. (1974). On establishing the empirical dimensionality of theoretical terms: An analytic example. *Political Methodology*, 1, 75-96.
- Diggory, J. C. (1966). *Self-evaluation: Concepts and studies*. New York: Wiley.
- 藤島喜嗣・沼崎誠・工藤恵理子 (2003). 日本語版自己好意/自己有能感尺度 (日本語版 SLCS) の作成 日本社会心理学会第44回大会発表論文集, pp.538-539.
- Hensley, W. E. & Roberts, M. K. (1976). Dimensions of Rosenberg's self-esteem scale. *Psychological Reports*, 38, 583-584.
- 平井美佳・高橋恵子 (2003). 友達関係における文化 - ジレンマ課題と友情概念の検討 - 心理学研究, 74, 327-335.
- 木谷尚美・谷口好美・成瀬優知 (2000). 自立高齢者の残存歯数と社会的交流との関連 日本老年看護学会誌, 5, 71-77
- Leary & Baumeister (2000). The nature and function of self-esteem: Sociometer theory. *Advances in experimental social psychology*, Vol. 32, pp.1-62.
- 前田尚子 (1988). 老年期の友人関係一別居子関係との比較検討一 社会老年学, 28, 58-70.
- Markus, H. R. & Kitayama, S. (1991). Culture and self: Implication for cognition, emotion and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 松尾由美・大西麻衣・安藤玲子・坂元章 (2006). 携帯電話使用が友人数と選択の友人志向に及ぼす効果の検討 パーソナリティ研究, 14, 227-229.
- 宮本聡介 (2007) 親しくない友人が「友人」でありうる条件 日本社会心理学会第47回大会発表論文集, Pp.522-523.
- 宮本聡介 (2009). 友人ネットワークサイズと自尊心の関連について 明治学院大学心理学紀要, 20, 19-26.
- 大戸紹子 (2005). 「日本における社会ネットワーク調査 2004 結果報告」『赤門マネジメント・レビュー』, 4, 313-322. <http://www.gbrc.jp/GBRC.files/journal/AMR/AMR4-6.html>
- 内閣府政策統括官 (編) (2004). 世界の青年との比較からみた日本の青年 第7回世界青年意識調査報告書.
- 中野綾子・永江誠司 (1996). 青年期における孤独感及び孤独感の受容と精神的健康福岡教育大学紀要, 45, 309-321.
- オリコン (2010). 引用元 URL <http://life.oricon.co.jp/73727/full/>
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Rothbaum, F., Weisz, J. R. & Snyder, S. S. (1982). Changing the world and changing the self: A two-process model of perceived control. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42, 5-37.
- 鈴木有美 (2002). 自尊感情と主観的ウェルビーイングからみた大学生の精神的健康—共感性およびストレス対処との関連—名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 49, 145-155.
- 鈴木由美・藤生英行・田上不二夫 (1999) 「女子大学生の友人数におよぼす自己効力と性格特性 (社会的内向性・思考的内向性) の影響について」和洋女子大学

- 紀要・文系編, 39, 129-138.
- Tafarodi, R. W. & Swann, W. B., Jr. 1995. Self-liking and self-competence as dimensions of global self-esteem: Initial validation of a measure. *Journal of Personality Assessment*, 65, 322-342.
- Tafarodi, R. W., & Swann, W. B., Jr. (2001). Two-dimensional self-esteem: Theory and measurement. *Personality and Individual Differences*, 31, 653-673.
- 高倉 実・新屋信雄・平良一彦 (1995). 大学生の Quality of Life と精神的健康について—生活満足度尺度の作成— 学校保健研究, 37, 414-422.
- 丹野宏昭・松井豊 (2006). 大学生における友人関係機能の探索的検討 筑波大学心理学研究, 32, 21-30.
- Triandis, H. C. (1995). *Individualism and collectivism*. Westview Press.
- 辻 竜平・松山久美・針原素子 (2002). 日本における知人・友人数の推定 数理社会学会第 33 回大会.
- 植村善太郎・小川一美・吉田俊和 (2001) 大学生の適応過程に関する縦断的研究(2) —大学生の学習への取り組み、および大学生生活満足感に関連する要因の検討— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科 紀要 (心理発達科学), 48, 29-43.
- 山口洋 (2004). 4 年で進路を決めて卒業するのはどんな学生か? —ある私大での追跡調査— 仏教大学社会学部論叢, 38, 49-62.
- 山本真理子・松井 豊・山成由起子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-69.
- 吉田俊和・橋本剛・安藤直樹・植村善太郎 (1999) 大学生の適応過程に関する縦断的研究 (1) 名古屋大学教育学部紀要 心理学, 46, 75-98.

The relationship between friendship network size and social self-esteem

– Comparison between Japanese and American university students –

Sousuke MIYAMOTO
(Faculty of Psychology, Meiji Gakuin University)

Abstract

Some researches pointed out that friendship network size relates to self-esteem. In this study, we focus on the relationship between friendship network size and social self-esteem, and compare this relationship between Japanese students and American students. 169 Japanese respondents and 220 American respondents were recruited on this research. Range of 18 – 22 age were screened from these respondents. Mean number of friends and number of close friends in America were larger than in Japan. This result means the size of friendship network in America is bigger than the size of it in Japan. Social self-esteem (SSE) scale featured in this study showed high reliability and validity. Correlation coefficient between SSE and the size of friendship network in Japan showed significant positive score. On the other hand, correlation coefficient between these two scores in America were relatively lower than Japan. These results implicate that the positive relationship between size of friendship network and social self-esteem is stronger in Japan than in America.